

南方紀傳

內務省圖書	
第	號
部	類
函	冊
共	四

和書門	
一	三
二	二
七	〇
三	三
四	四
冊	架
函	號
類	冊

內閣文庫	
和	書
一	三
二	二
七	〇
三	三
四	四
冊	架
函	號
類	冊

內閣文庫	
番號	和 13203
冊數	4 (1)
函號	140 217

140-217

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak





南卡
後醍
辛元

南方紀傳

後醍醐院

御諱尊治御即位
十三年月

未辛

元弘元年春彈正尹前大納言師

賢卿遁世の長尾山の山に
川

しりや 和奇一首と詠く 去文を 文師 惠

う
ゆ
と
は
は
は
と

又ハ又位院分方とあるく、これより、
浮世歌

五

師

又又ふくまひのしり毎換をう。

二月山内東端れ北岳の荒徒等中あり
くして合戦ありき 二月帝山内記
は鏡れきめ新幸山推後経ありし
島親房賜れ長頭家にて後主様
幸山内ありしに衣を給ふ
夏八月十一日東使二階堂十北判官
長井を以のく二人上落して去後
孫丹入常盤後河のく範貞雜賀
隼人依つりて参観上人文親信正

大慶信正より 六月八日国東
又下向秋七月三日大比震紀別千
里の溪二十所陸地ありあり
八月参議源持房出家 ねがひ
七日大地震富士山の絶頂百餘丈
くばり 同十一日石少辨後基と
石少三人の僧徒配流 八月九日
改元これと大和記国東へ往を志
れども改元の詔書なきあり又国東

とて降参し先例ある元弘をわきま
ととて元徳の暦より四月 四月
帝大塔れ又師の二男中納之具
又おきてけいとの残りふくし国東
かむんごしふこの事国東はこと
わきまら相換入道ふ河大さよわき
先後基つとくくらしと 国言
東使上洛して今とを配流して
まづりあひは近江大塔れ又降参
とへしごまり 人知言師賢長
尾の心なとわきまと訴へてこ
りやう

いふはふは下業おくれはるゝあきれはる
あひのくはるゝあきおてまふはるゝあ
四月廿四日戌の刻自主上南都へ参
そのちまふはるゝあき 中まの野
まふはるゝあきおてまふはるゝあ
野の天へあきおてまふはるゝあ

文母文は乃せもまゝんておろし
とありあり 大納言師賢ハス
し成りし山つゝとむく 同月八日
合戦もてふらんして 仍く本時信
の家へあひは 酒本近将監一類
とよとくく討死と 九月九日持
明院のまゝ文量仁親王踐祚
同月七日園東より 大佛隆興寺貞吉
大仏殿守貞や足利も氏等と

洛して差置へるう 同月亦有
笠置へてとて 陶山小見山 秋少官
軍ふと 綿織花弾判官保義継是
義右下十三人 誠中よりく自害
今之川牧落山城のまゝ 又其郡ま
てよりれてまゝ

御製

うておろしをいふは ちりあうとまゝなれり
冬十月十日 久米等院は いまだてまゝ

同十旨六波羅又遷幸 同月右近

城あつる 橋入道自害

申元弘二年同元德四年三月去

年を捕れり六波羅より死罪

流刑の決あり 三月五日越後守

仲村左近を監河益六波羅より入

同七日主上隠岐の玉へ遷幸 同八日

一々宮を良親王ハ七作の玉大光寺

此文越中同妙法院の文預被玉り

よりにてより恒良親王 同ころハ 成良

親王 同ころハ 義良親王 同ころハ 山切雅行

よりよりよりより師賢那ハ下

統の四千葉ハ既流 同カ二旨

即位

光嚴院 後伏見院 同日正長ハ改元

長八月十七日楠正成天王寺より出張

隅田より来る指又曰所楠木退治に

て天王寺ハ後向 同十一日会戦ハ終

せいといふん 秋七月十九日宇都宮治
を捕ふ能かきく後向楠木河内へ入り
づく 同月廿七日公能くこひつる
又市松衆の援列あかり 九月多國東
勢強食もえて冬十月八日こひ入
同月廿九日師賢の配取より逃去
祥世

冬は武蔵守のいふとてたがさうと我人等

十一月三日大掌會

癸元弘三年國東正慶二年壬辰正月廿日
徳玉の軍勢よりあきけて市松衆合
闘心へ致向 二月三日市松の城合戦同
月全闘心の城合戦 同月十一日新田
義貞大塩文計合戦終ふ 同十八日
野の城合戦 同廿日 法時全闘心
へ致向 同廿四日市松の城あつる 同月
廿六日城あつる 壬辰二月五日六波羅勢
本判官時信常陸守前日付知るや城

えて右に退治のゝる懐別摩耶之
城はじりいれりく十一日合戦六波羅
城よりかく 同月廿三日の夜主と隠
波のまゝと居るをみゆき日共日伯
者れ同右わの漆ははるる名わ
又ち所長年味方はより同月廿六日船れ
この山へ遷幸なりしをみゆきとき御製
とくくしる

いそれりやうのめは意破城の山のとにありしを

同月八日六波羅城よりて摩耶の城へ
むふ 三月十日瀬川合戦はるる十日
又合戦六波羅城よりくしる名わ
くも敵と追ふてせめりあり ねりく
十二日京都より合戦右にまゐる
同月廿六日六波羅城より追へむふとみゆき
合戦京都よりと ねりくく廿八日
れ所僧六波羅へ追向せめりしと徒
ふりかく 其四月三日申院定早朝

法平良忠和入道京都へせめのかり
合戦とていふらん ねさくく八日
千種の中ね忠和京都へ参向合戦忠
顯といふ 同九日公堂筆を筆室
衣笠兵火といふ又とくく安上

同十六日足利高氏入洛 同十九日
名越尾張のくも家入洛 同廿七日
京勢久我暇かといふく合戦高家
和といふあめ討死 同日足利高氏官

軍と成と 五月廿日官軍六波羅
とせむといふ六波羅没落して仲時
河益主上上旨と具一にてまつり
同京とおもむく河益主上とてな
れ矢とわいして死と仲河着る
かといふく自害相とてくく軍長に
とくく自殺とて主上上皇親先帝
入れたの官軍とてくく 同十日
千葉屋といふとてくく 入る守

此文紙中の玉といふは名紙を庫
の奥に持たし置て萬里の
小浜番房配下にて賊の
卒をわづらひて八日
國東より新
田義貞にむかひて
わづらひて十日
此國小浜番房といふは
同十二日久川より又
合戦強食勢
といふは同十日
強食勢といふは
國戸、後向合戦
新田といふは

同十六日分信川より
合戦といふは
勢といふは
同十八日強食
合戦といふは
橋相換のとき
守内自害といふは
法師
一族といふは
合戦
官軍といふは
三郎といふは
長信といふは
房
賢といふは
長信といふは
世といふは
強食の軍といふは
文守親王といふは
家津
系といふは
一族といふは
十二人といふは
葉大
勢
自害
同十九日
長男
相換

太皇太后御幸 八月廿三日帝御幸
船の上還幸 同廿七日播磨書写
にありく廿八日法苑に同所抄其
庫へ遷幸 永松入道又子系向
六月初日鎌倉改落れり 新田義
貞治を ねりく二日楠本正成
大膳と率いむいのも 無庫へ
同六日永寺ぬえに同七日大門へ遷幸
年号ありぬ志言せり 公家け官位

とこれとくと初定あり 先皇配流
文方なりひは云家茂家僧徒國
より上洛九別れ探題所理免英時
か式大友に合戦して先月廿日英
時自害のり 南地大友少計り
より治を 秋七月九日千葉屋れ
より生捕十八人 永心よりくち
所よりし所所理免英時 毒 永福
おぼる
寺時の
むとわ
ふやこは急内縁にけり

はあつを所をかた女房いあー一残
去のひてもあう

あうりーのけりいあーいあういあういあう

同月廿二日高親王山入洛山諱護良
征夷の軍中任と二系た大臣道
平氏の長とより久我の長通右大臣
西蓮寺の公賢内大臣より 尹大納言

師賢の墓にへ文貞とよりいあう

新集入

秋七月守邦親王薨逝^{四年} 為十月

十日山島頭家正二位の叙と 義良

親王隆興大守に任とすからいあう

へ山下向鑑城上野今入道道忠いあう

一海よりいあう隆興といあう

徒とくく移澄 十一月二日所

文苑門 十二月廿八日成良親王東

園子獲とくく強食中山下向是利

たふ直義^{義相}執持より二階を

小海山城要作とくく敏と入せり

甲戌建戌元年正月廿二日恒良親王

曾太子より
十三年
ねりく
大九

改元 三月九日當時餘類本回誤
吾一族等謀反してかへりてを
ふたれども本回誤云ふがく

同月五日、一族蜂起して、紀伊、飯
盛、山、城、を、か、ま、へ、に、く、こ、り、ち、
柿、本、を、こ、り、つ、ま、し、め、ら、し、
て、い、ま、し、め、ら、し、て、い、ま、し、め、ら、し、

和歌一十
日石清水
舟行幸
同十

四日万里小波者、唐に遁世律師となす。
護良親王に「いづや隆良誕生す
源大納言師守にけむ」と。夏八月
三日壬戌、叙母とてつゝ准后へ中
とや。大隆に「文帝位就む」とむけ
んとせしめんとして、院授とて、一に殊
反事として急をうけしと祈ふ。准
后とて、いづけに「我妻は之に死す」と
言ふ。帝大に「逆轉あつゝ護良親

王よりしこりしに律師澤侯
殿法中寺疎疎せりる十月
奥河津將れ山徒内如る京下義
良親王へ降系 ねかしく十
八日護良親王と高氏あつて
連綿金へりて一光寺とてとを
ふさうしり 近衛經忠の右大
后西宮寺に賢い右大臣右大臣
の門大臣に任と万里小路宣房

一水と叙と

建武二年春二月小島顯家卿
中納言に任と 奥河津文三
と叙と二月西園寺に公家指中
中納言全吾氏光三吾文衡入
乃謀及めりてりてりてりてり
高氏いつくしきと系けい 同大日
か好の玉に任一人同司葉室宰相
光顯とてりてり 小島親房に

長顯信顯他顯雄三人作勢よきへ
下向西園寺公家へ僧堂相換次良
河行去二月より信別より蜂起飯
訪三河のくく二浦へ入道清久の城
のくく増益民ア大捕工役中同輩名
等一味くして強食へおとしき聖福
寺通より西門刑部左衛門少輔
官秀イ高朝細川頼貞系三頼貞少四郎又八郎四郎武義法名義阿長興寺此四
おて合戦官軍といふん少なる朝府

中よとみく自害新田に所上列より
おてたのい利よりくくするく
名辨より河邊は水よとのく蜂起
と秋七月廿二日は利重義加はく
とあらて上洛してくく剛色作賢
れくめわめて護良親王政東亮
寺よとのく客くも成良親王
とい大に河久具足くくたてまつり
治と凶徒追懸合戦中義俊河久具

手紙川原より少くも後落洞迄
一隊より付死にた人語れま
とこりより中流に殺すことと
うしねぬ徒よりぬ殺さるる
は今川名兜耶に所れこころ
まつくたふこととものくち
うらばとて自害と 八月二日
氏と徒退治ありと云天子山講
れ字となまより氏とありし

たすく八日流矢に中しとあり
合戦官軍ありてあり新根あり
各々諍めて又合戦出徒ありつ
山彼中も徒信清久山城ありといけ
とありと葦名判官持明自害
たありく十八日相模川より合戦
今川頼國ありとありといへ
とも官軍ありとあり出徒懐金へ
川退力けとて大いありといへ

坂宿之河のこゝに十三人自害
各々の皮残るゝ 八月十日
奥列より西徒蜂起とて
うゝいゝ作を引朝とせむらふ
退治と 同月廿九日
軍と号と 同月廿九日
証夷の

加賀の國人聖寺に城とて
紙河急らうとて 高氏隆奥の
と家長と奥列の管領とて新波

此館より 冬十一月十八日
川河波のこゝ和氏とて
さぐ ねりく十九日
親王と新田義貞と
法れ勢とて ねりく廿七日
義貞とて義矢刻とて
官軍とて川河波
討死 十二月五日
又合戦とて義貞とて肥前

經入道塩瀬資忠討死 同十百和
根竹下合戦竹下恒人らと海軍
守先陣義貞らと 國々み
とのく朝敵蜂起せしと恒と
萬度使にふい利ふしてや
こよ入 同月廿三日奥州より
あつて陸奥のく家長と相る流
子兄弟合戦 ながく廿六日
こりふく又合戦

丙延元々年壬二月廿九日改元足利家
よへとこれ建武の暦とりらむ 正月
十日高氏よりこよ入帝教へ遷幸
初使川系父子二人自害 川裏焚
れためは炎上結城親光討死 義良
親王小島頭家へ東國勢と率いて
せめけりし軍方斯波隆興らと
みゆい又相る常流等松平観音
寺かとのく頭家へれふは自害

同十二日義良親王顯家弼江州へ来
恙依、木氏頼。觀音寺此城とせめ
かといふ大館中惣大捕自害 不可
十六日園城寺合戦官軍千葉新田
氏胤討死官軍うらかつ長火、あ
ま寺門とくく焦ると官軍より
敵と追ふに、武川系とて、お軍方
松東、細川討死官軍こゝこい、
官軍利かりこい、こゝ細川之陣、

うらこゝあやうき又坂中あかへ
たかしく、九日大智院の文、陣中々々
良親王、大勢と率して坂中あかへ
同廿七日八日九日合戦、官軍氏叔父上
松長庫、惣房、下、ひたれて
中、此門系、極、祇陀林寺、比、藤、さ、ま
と、わ、く、自、害、た、れ、子、憲、藤、堂、以、兄、才
二、人、川、系、あ、と、わ、く、討、死、官、氏、方、保
定、帝、伴、賀、お、馬、尉、光、泰、男、は、所、光

長とうふれ怒る氏丹波此國へ落
り二月二日山門より還幸龍山院也
いせ海ふ 同五日顯家彌義貞播磨
れ玉ふ愛向 ねねく十日橋山
あく合戦も氏れ味方うてあ武
大伴、勢多しといふこととくく
いづくも氏を義長庫奥れ沙堂
あくとくは自害とせんとせし
細川彌れ津原志よりよいさめ舟

かのせ九列あともむくそれ付も氏
今ふふあふ此浦さうと昨や怒りさひふ

細川和氏

武をこれやめれくといふれりし愛護る
義良親王元服か冠小島親房彌 四月
九九日改元 三月二日江田長部大捕り
義大破れるれ氏明播磨へおとむ
くねかしく八日陸奥あとのく宮
軍廣橋仲泰と大ねとて相らぬ

平下靈心城よりあつく三保河保
城とせむ。敵おる所二所先敵より
ふかく。結城白河へ入道道忠の家
人中村六郎等守む。先敵野堂
母輝記とあふ。又相る先敵よりむ
い合戦。わづく。大言廣橋経泰
おる敵よりむ。い。て相る先
敵よりむ。大敵とせむ。わづく
大田口河泰とふ。い。同日義良親王

同日顯家彌隆奥より下向。其日
六日相る敵よりむ。敵二所陽中城坂口
石川等菊田郡よりむ。い合戦敵より
む。同日九日常陸王小田右衛門尉
館より敵よりむ。い。わづく。奥列より
廣橋肥後よりむ。おる敵よりむ。い
む。い合戦敵よりむ。い。わづく
其日親王。其日奥列へ四十人
同日其六日。其日執紫よりむ。い

周防の五箇戸は悉く浦原に継ぐ勢
とりふとれりく廿八日持明院と
宣後伏見院宣と書氏にたまふ

五月八日顯家彌隆奥に勢とりふ
一那次れ城とせりふ 同月十三日
義貞乃いけり是を兵庫に引き
せり ねりく十五日楠木兵庫へ
下る 同月廿四日顯家彌小るれ城
とせりおとく相見え胤兄才へ人傳也

新公 同月廿六日兵庫湊川合戦
楠木兄才自害官軍歩頭とてこめ
り ねりく廿九日帝山門へ上る
同日書氏とてこめ建武の暦と
りらい正をれ天子才二れをい豊に
親王とてこめとてなりんとて 六月
二日東勢山門へ殺向合戦官軍新公
よとすい千様の忠顯彌隆門正忠所
討死 十八日 ねりく十日持明院れと書

室祚 同月日京勢に官軍を勤す
よとあり合戦京方多旧れ頼氏以下
かりく少死とるをふれと師をい
をさるものらと謀せざるをいふ日より
りるまでのあいづる敵味方おろくお
死とむれく毎日官軍京勢とせし
る官軍利減うしなれ馬場村房秀
以下討死と 秋七月十日義貞以下
いさく京勢よりと合戦官軍と

いさく京勢とせし長年等討死
八月八日陸河内司はとれとつる
して石川れた松山の城とせしと
敵降参 ねうく二日依竹石川れ
凶徒とやういふ久慈京小里彌母殿向
京家つれ味方おる京方以下おむい合
戦凶徒二階と五段とらとる

八月十五日新帝踐祚 四年

五代系圖
見へし 光明院 人皇九十七代 山輝豊仁
山母 光厳山偏子

大内経忠の朝に因白より参議係
通中内門系議後系系系大
中内薩直等職よりこれ先帝
めらるるともたてまつり山門へ因道
こまわりあり 冬十月九日東宮な
るひも良親王残部のみよりせ
るふ所次めとめく千葉友貞胤成が
へ降参る ねらく十官城が全ヶ
破れ城めく合戦 十一月又合戦 三月

九日先帝ひせくはくことかきし
台中へ後幸 係親房入道伴鑑玉へ
移く ねらく大内奥別より
取家彌 城めくこれわら後系隆資同
實世おめくこれわら後系先世の
とめく天とれこれとけつ さい内中
山門系急より

丁延元二年小朝廷建氏に年めわらるる
月弓氏式部大輔急頼と奥別れ

頃とありて急物なり。しるすに、氏家入道
道誠戒イニ代官なり。同月八日陸奥よりあき
函使蜂起せられし。我良親王のこひ
又歌家彌作を那夜に靈と云ふ也。
清平結城と稱入道東海道徳野臺より
いづれ同日石大信公賢之大納言師基つ
中納言實任彌治湯とありて吉野より
さへり。同月十七日兼義宗急小朝又
とありて殊せらる。それより百餘年と

宰相の量、弼、宰相親光、弼、南帝、
 一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
 其、官、奥、外、依、野、堂、一、と、ぬ、く、白、河、入、道、
 道、忠、と、相、ら、ね、鶴、九、一、族、決、る、合、戦、あ、
 方、戦、死、れ、と、の、多、一、二、月、か、官、常、陸、
 主、小、田、富、足、山、か、と、ぬ、く、依、行、刑、部、を、
 捕、義、篤、と、小、田、文、門、が、捕、治、久、あ、ひ、は、
 常、陸、平、れ、大、塚、と、合、戦、な、り、く、其、官、
 小、田、方、一、り、ぬ、く、一、と、ね、り、く、九、九、

義篤ハ依竹
之家ニ代
有之天文ノ
比ノ義篤ハ徒
四位下ニ在リ
持次ノ

小田といひく三月中細言惟健ハ大義
弼菅原在氏大弁宰相清忠名
野ハおらふ事 同月旨令り時城
おつる良親王沙生害新田義顯
自害 其四月五日國白丸大信經忠
弼名野ハさくを給ふなり
十六日經忠ハ才基副少朝の國白より
言氏細川和氏ハおらせて公家の事
と領こと 同月義貞と前此玉に

心乃城を蜂記 秋七月十日玉司
顯家弼東の江九郎楠木丸を義人
とつはく常陸ハ玉佐竹刑部
太捕義篤ハさくハ名原義人等と
せぬ殺日合戦敵味方おろく余所を
と 九月十九日義良親王國司顯家
弼ハさくハ結城上野入道ハこれ敵と
なりてけりといふ事 其十二月
十日上野ハ玉利根河ハとわく顯家

彌之德金勢合戦官軍うらかつ武列
二嶽住人亦發實永兄才今とや次
わうく十六日武列薊山安保原と
て合戦官軍利あり同大官彌金小
壘とやわく合戦ね中前後腰城と
ていひく合戦官軍亦發義良親王
四司顯家彌上洛上杉氏部を捕桃
井接廣のゝ直常芳賀を捕入道保
うふぐんれ士とわつめ四日れわと

追ひせめのりうと浦の女今川を入
道心背を良き捕依滿義各黒田と
急陣とと破損をと破つとと時記
して彌金勢とと

戊寅

南朝廷元三年小朝曆應元年十月

廿八日改元壬子月英濃れ國多野
う原とやわく合戦 ねりく女音
南朝名田内大臣定房公逝去二条
師基彌内大臣母任と 二月四日

多賊廣れり師恭と波賴遠之や
と主て同音頭法と近けれさ
黒北川舟急陣とれりく十日
作勢れ玉を津河河俣川にやと
度く合戦我軍方ふがく 同九月
奈良合戦京勢うらり義良親王
野よりせり 顯家堀河川の玉を
向 去日少將顯信八幡の陣と
了り三月五日馬氏首西安京持成

と陸奥のうり候と ねりく

八日八幡のうりはに玉古市河
京合戦京勢うらり 夏八月十日
伝通小朝れ園白より

れりくカ二日和泉の玉増れ浦
て合戦官軍とえん 顯家堀河
かー 将中細言資朝の聲

れりくカ八日 將家 家房八幡の

宰相中乃雅の男

又後向 六月中よりく合戦城中

有殊功なりく十八日東京講義
魚田盛重討死と 秋七月十一日八
幡の城糧尽き官軍引去る
田七月二日越前北國足羽城より
合戦新田義貞討死 氏家重國七
北首領北 南朝よりぬく 顯信従二位
丹敷一隆奥のこゝよりぬく 顯信
四位上は叙一 佐勢れゝは任と後系
れ有資佐豫のこゝよりぬくと

なりく 丹敷義良親王為隆親王以
下ありきひは一品入即親房公顯信
弼下佐城道忠等 丹玉勢より
て勢列へよりぬく 八月十百為氏正
二位は叙と ねがく 十百南朝東
武成良親王として 與仁親王武東
宮よりぬく 同月十七日勢列
下向れ官軍従とよりぬく 丹玉へ
船 九月十一日 丹玉下向れ 丹玉と

舟をれみ碇とてぬく新凡とあひ
船とくく漂没と親王顯信卿れ
山船勢別れ藤嶋の里と吹火と佐
城の入道は沙船とてその移ら一歩親
房とれ船常陸れ玉川海と急船と
澄親王とてひとる良親王れ山子一歩
れ文の山船ハを印の玉白根乃藤母
はく世のそとる澄佐親王れ清詠

いそがしむとあそむやとあそむ神れ

そめら両文井舟れ城へ乃せ移る又清
詠り

願篤
考し明史記
本示日本国
王良懷トアリ

おれより二夜とて張衣あらとあそむ藤母
わうとそとる蘭の文良懷親王とて山
船四玉とれくこれより法あは沙下向
あふととなり 吉野より日野信
正親王と初使とて舟移れ玉藤
嶋よりとて移る藤母と人等ハ
は度れ大凡と船数千艘破損とる

親王は西舟はくわくけうしよと云
の事太神文にゆゑめ取なりこ
り料意かきり可く神急れ徳と
かんぐ一首のうたと親王はたて
まつ

非凡品也人自津浪軒後以作境

冬十月廿八日ハ朝又ハのく改元曆通
元年とと十一月ハ朝又ハのく親王
沙楔大掌會
為氏高師杜次伴

終此守護

戊寅 南朝廷元四年 小朝曆癸二年

あふちを倭勢のまゝりとてかく四司
を師とて合戦 其四月八日南方
より愛洲宗實より倭勢は四朝明
那比功職とてふ

木佐渡の入道配流成良親王
 木佐渡の入道配流成良親王

秋八月九日南帝涉不

詠
 ねがひく
 十五
 義良親王
 十二年

踐祚於大信經忠公此亭又遷於

三種の神器とありては
不

く十六日南帝崩御
四年四月二十三日

院南朝之經忠公園白之師是

弼右大后子任之資次弼別當

聖洞院升矣世曰陳降次貝傳奏以

九月六日 菊山源孝克如家

冬十月八日新帝沙昂從

南帝後村上院

一 入道親房公常陸の玉より神皇

正統記
卷之五
先帝女

榮子心かゝりと書を讀み戒師

蓮院慈道親王なり其の時一首

此哥と為る親王よつはし

二品慈通親王

之いふと後に入と也又知るは墨深は袖

一

二 亦も 貴親王

名かゝる神祇のさくしととまらる神官を

南帝より作勢を神文へを幣使

みと三種の神器と山孫ととく山裂

に神祇のさくしととまらる神官を

九重にとまらる神官を

紀南朝貞和元年の朝曆三年の南

南朝の月日改元 古野の南帝

山即位ととまらる神官を

をなかりし神官を

敷樓園ととまらる神官を

多ととまらる神官を

これより一ととまらる神官を

田の城ととまらる神官を

一ととまらる神官を

百官の位職事 文領の位職事

末代まで玉の鑑ととまらる神官を

御まゝに大智庵ととまらる神官を

順
按元二
職原内
三ノ謀有
是親房
ノ覺遠
次

細世字
ノ系圖不
見基細ノ
弟十ノ次

天下戦國れこころこころありまれ
旅館もよく考へて文書等
あそこめとろめとろとありま
ひくめれま作めとろとあり
これ再延とて一果親房卿
勢とつひく宇都文細世とて
うらとて 菱に月塩法判官
おきのまめとろと自害 五月
顯信弼四司として奥州白河

城下とてねくササノ下総
的の城没落 一果の文隆別へ
宇律筆文と号と 秋七月新
他信濃れまととびく 九月
他退治のころと破新明入道
大ねとして信隆のまとい
く十八日義他死のまへ
まら 壬午申入洛 南

扁僧正神凡和記云と傳り
朝也妙と 白河後城親朝
理れを史也位と 相のくはる
常陸此五也とわく是日少なる
也小田治久蜂起敵名系伯竹と
りくと

南方紀傳

庚辰ヨリ丙午と廿七年
嗣ナク貞治五年と

己辛 南朝貞和三年小朝曆應四年也
わきり

越列のこやと蜂起家良親王信濃
よりひたし也越中のみといふ名子
此浦也着津 秋八月十九日壬辰
秋木飯座 南方西應寺一良親王
宇律 常陸國小田の城也いふ
澤文 日中ぬ取時親房彌建枝持房也

源持宅男一条が、又所記見奥信唐橋肥
（りちきき）後の^{りちきき}経泰刑部大輔秀仲等伏
奉と、御存持る秀仲トアリ自筆ノ奉之此方修造文内
か補行朝石川石橋河村六郎田村
の左司南部滴石のこころ一味して
新波若手あ邪へせぬのかと歎
貫お羽のこころいふ一談とら
ころ

壬午 南朝興國四年 小朝庚永元年也

あつち 壬午三月法勝寺炎上 其に
月廿七日改元 秋八月廿八日武方橋
別玉丸の城にたてこもりちと依の
うと所秋これとせぬおとと 九月
小朝仙院伏見殿に幸み七夜彈心
か彌頼を討滅めまよりあひ狼藉
と 冬十二月廿三日高氏代母堂
二小清子逝去法名名冠等を
かんと号と

癸南朝兵五五年ハ朝庚永二
あつて 壬二月石堂文内が捕入
道秀慶方より白河強城親朝
取父子の方へお軍れ味方なら
のしつゝりあつて又お軍のし
教書こつてお軍つゝけと
こと強城にねえとつて 三月
廿九日常陸回國の城小田城
佐竹強城相る。寄さつてお軍せ

む文方を日中お一条お小田強
つてお軍せ 茲に月二日寄
ふれ大お強城を朝がねのつて
け。一族つてお軍れ 佐竹
お小田強城の城とお軍れ
しつて敵方の長根の通路を
お軍れお軍れお軍れ
三河のしつてお軍れ 六月十日
小田の城退治のしつてお軍れ

常陸の武方徳の元々着陣

わろく十箇小田此近下三村に陣
とてあふ合りぬ教日とて

わろく武方武方より合戦とて

わろくせぬふ敵も負死人千餘人

師を要害と引りぬくわろく

武方武方ぬくものとなしとて

敵出わると両方野伏いふとて

秋七月七日武方の役人あふえり

武方よりてとてわろく

十箇一の武刑部仲と自筆奉書アリを捕あつて

白河の親朝と仲理に更ぬと

わろく十箇が奥羽合戦武方より

又常陸の郡新城にて合戦武方小田

の一族完戸野等多討死 師を

常陸國河内郡の郡指れ城に

てぬくわろく武方師を方より

討と武方多討ふれぬとて

長沼結城、
一族元来
兄弟と云ふ

又方勝利城をとりぬるなり
敵の城八丁目垣本惣文若元寺に四ヶ
石城焼くなり ねがしく飯沼指込
同夜伏せとして師を陣屋とく
焼くなり 九月三日師をわめて考さ
しる所方長沼惣敵こころは河一果親
房入道なりは顯時より白川親朝
又子方へとよりぬか替なりふととも
親朝にれはとととと 冬十月小田が

治久も師をとりぬるなり
しるく一果の文并親房入るまじ中ね
か指貝信秀仲國の城よりなり
とね文なりは顯時ハ下妻の城より
せしなり 十一月三日師を小田依竹と儀
し村田の元日と陣 ねがしく八日師を
國の城の元日とせしなり 一八日大室
の城よりなりしなり 又國の城下妻の
城に從還の路をとりしなり 一八日三ヶ所

大御うゝて大寺を搦て常列の勢
数千騎大室の城南長守を降参ら
顯信のいふに信城の中は信と
のと卒して赤松合戦よりから
降参の城は信を交り痛め朝にてこと
を真壁の城より法龍入道ことの中
郡の城西明寺の城より東方の勢多
くたゞしむる村田の元四保の城より四
保後河の一人敵とて金とては
是れ少くとも書こととて家へ城と
あらは是同様のことハ敵は降参し師
を同様のことは而して村田志を
鎮安松とてこのこととて知と十
二月かいては師を降参の事とて
小田の城はあら

甲南朝貞國六年小朝康永三年より
わづらふ宗良親王被別より信濃の
玉ふりて顯信殞陸奥よりわたりては

とのとりくもしくとと玉氏をさる
とと諸城親朝文方とと心さひ地人
とと師をよくとと正月十日親朝歎と
なり

親房卿送結城狀

去年六月山徒師あり等發來の後
勅刀夏自水特其境者依無異途
連々發羽敷之上自他形勢推察更云

不貽歎寂前依被申領狀諸人暫雖
待枚共く州、鐸及遲川經五箇月
之間刻治以下慄者忽以變下好
属山徒仇後當城以來分拭弥縮
士率已減艱難く甚不言而一知空
歷九箇月未見一人く勅刀周章く
至、無物取喻要當時近境く中御方
城墪總六箇下し先此園城者宗祐
一身日夜馳走至今可謂堅確也至

自余之族者及覆之情極以巨則
凶徒專依圍當城船路陸路共斷
絕於白晝者更無往來之人臨暗
夜適雖有一兩之入殆希有之候也
依之面失膽畧或放却家或交
易甲冑如此之類縱雖欲全忠節
果而無歟骨易子之窘乎下妻城者
本自人情不一揆正負者尚幼稚扶
翼者互爭權隨而浮統不休私廟

亂可出來之態也竹園御坐大為顯
取朝臣經廻之間聊如斟酌許然此
外中郡城者顯時以手勢等也其
不足持者糧又無蓄真壁城者法
超一人雖存忠義一族即從皆以有
內通之因西明寺城者亦自遼遠
殆不及音因然者件五箇所之城
危如燕之巢幕上伊依城者行
朝々臣忠心不撓歟之間當時隨

分不危之域也然而國下患兩城
難哉今至極者以一不可相支
也抑勦力同復其境計畧之分
大概推察之後者不及盡詞依
無勢斟酌之条誠又非無其謂
取詮於時節者可在東奧之勢
發向之斯乎凶徒未去國府合戰
之勢機宜叵測我送日月者此
境官軍悉如向枯臭之肆イナラシ歟雖

導江海之流其有何益要發向之
段猶不容易者出士卒於必境可
被示形勢歟歟之由自去年五之雖
懇請猶以不復行之間御方取存
逐日今退屈者也賄一位在國之時
愚身上洛之後就高氏叛逆之風
國下日上道遂成大義畢彼時
當恭不幾之也凌數千里之嶮難
早達先途是志之切也弟二之歟

退回府入天山取相塞人々兩端
然而志之取之押平海道益于畿
内畢至其身之大亡者水士寧
之敗北天運之令然也同時戰死
之族亦以不幾雖怨其身之不孝
忠孝之道者可謂無遺恨也然乃
以彼時思今日真實被存其志殘
置守城之勢被發向者存達以
西官軍益無同心志是切与不切

也殆見近日之難夏之火急甚於赴
湯灌至老身者一瞬之間全忠義欲以
余命報先皇計也大義之成否必係心
府軍余云極者生一命之外無他夏更
不可為遺恨情思此理且難知慕殆依
難期後信聊取摠之蓄懷也烏之將死
其鳴悲人之將死其言善云我國者天
祖經始之地日神統領之別也聖々相承
授受不惑且依禪讓且飯正理所經此

十四代一百七十余萬載也縱^レ雖及末世不
可有違越日神誓約可既^レ無窮故也依
之上自神代之古下至人皇之今欲傾國
冢者不久滅亡欲圖^レ逆節者必絕種
類世之所知誰敢疑之而今高氏等何
者哉罪惡之甚先代未^レ圖盜據中原已
經七箇年何其多幸也但承平將門
六年而亡永承貞任十二年而潰先蹤
郭有^レ時節之未^レ到欲情見和漢之風

成大奸者雖終取敗已有過人^ノ
智力暫保^レ首領也今高氏等為^レ賊
可知改道之器無可貽子孫之謀家僕師
直假虎威陵^レ碑皇代之武士彼等一族
誇張已比擬高時等行^レ夏元皇代輩
皆是王民也保元平治以來屬源平之
家各為陪臣不屬皇家之列承久以來
義時泰時等指麾及百十三年然而
彼義時泰時等隨分存公儀不^レ忽

諸朝恩接肩^ス傍倫似^レ弁改術依^レ之
相續累其世兵權被天下畢有心之
輩見先祖之譜系者可^レ不^レ心耻哉幸
過一統之聖運匪^レ帝失本取帶直^レ
義綸言恣給官祿誠是會遇之時
節誰敢周旋之而或為道一旦之害
或為全所帶之利与同于^レ氏逞節
剝項戴師直等何面目見先祖於地
下遂乃屈節忘名之輩為數庶之降

人^レ之第^レ之耻何更如^レ而更無面耻之
也可謂文氏之道掃地而盡也就中義
平逆乱之時先祖秀卿朝臣立勲功先
兼任下野武藏国宰後任鎮守府將
軍已來代々異他之一流也於清盛賴
朝等更者起自^レ勅命管領武門之
上雖不能左右謂彼等先祖者有何
用捨多幸附屬定^レ非本意歟適後
旧儀可與家業之處皇^レ背

皇家與同逆徒先祖若有冥者豈不
加睚眦之怒乎爰故入道上野々朝臣
深存忠貞感悅一統之運有公私被
表懇懇心中更不忘之足下父子為彼
嫡流于今在違共親先朝臣死節其
跡相續而致忠是併忘魂懇誠之
取ナリ及積善之餘慶也此此於衆人者九
牛之一毛論此於自門者有烏之一鶚耳鳴カ
帶此名譽抱此忠節遂無瑕類弥矣

先華豈不被庶幾乎惣可為辱後患之
大法別可謂昌先烈之孝道而如聞者近
日游說之輩於所々各樹異儀歟或云
堅守城塲伺天下之形容不可必好排
戰ヲ馬氏等誠有運命者一身不立義
何為臨時歸伏者不及共家之耻云云
或云坂東諸城縱雖令覆沒與別
相支者又定可送時且欲京都諸國
之謳哥山徒滅亡之兆。稠疊隨更

軀成大義者還可有臣益之或云
身一廢有時運命在天固可見損益
之際故贈一位等為全忠切雖令上
道不達本意先鑒如此宜加思慮
云如之儀於此境猶以多々自可有被
觸耳之途不并大義不存遠慮族者
厭即時進奏之經營必可與同緩急
之義也勢且又愚老年来隨分具負
之類猶以有向背之所存頻揚不可

何況於疎遠之士寧平シヤ至如此事者
雖不足介意萬一及大義之障尋者
可妄公平シヤ也當家出自皇族久立
公門晨夕所習者朝廷之礼仪和漢
之憲章也生於太平之俗不知亂代
風何況武家之故實邊鄙之成敗万
而不得一理諸人不受皆取シヤ自顧也殺
此身不可塞其傍矣但為先朝之一老
具蒙ト慈勅之顧命殆傍若無人リ

於當代又有保護之勞恐似一身之安
否可被測御運之敵慮也依之
諸方存忠之輩伺坂東奥州之形
勢各擁義我旗之時節忽失一軍者
萬方可解鉢之條為之如何奥州一
方皆雖守節義諸方凶徒一面攻之
者適順之輩及覆無所疑矣將軍
三位中将赴任之後三々年未立匡之
切其身未練又無扶翼之輩於愚老

共余者雖有其志更有何益然乃
據今時之衆議者不異積薪於猛
火之上暫安其座別有異圖者不足
論之欲全貞節者爭無遠畧貪余
命望勸力者上天罰之祖神捨我
豈唯為天下發此狂言君子論之耳
凶徒已覆滅聖運令一統者面
々朝將火久先華唇吻之所及緣底
存等用縱又不叶衆望者退此一身

有何遺恨各立大切宜決聖斷也此
等之條深被加商量者雖存雖亡可
無心底之鬱不宜亢賢

二月十五日

親房

如法院宗良親王を印の回めらる
まけらる玉人地むさけりけきとこ
何の玉章春は足物へうらゝまうへと
しりけりける由事申
一為さの思八柄れくとしてまきとけり
ごめりて後河の玉へりてうらま
りり皮回めは将中女貞長入の藤原
之二乃文方少く具良親王が孫て
おろしきとてさうくそれあり

と海を渡りいふれ眺をばめくをばめ
都の人よんをまかりし山をあらうて
のまき海のわりあるをて終りしを
二条の宅所へけりしをあらうて
ふせしをあらうてふせしをあらうて

田舎

田舎

さやうさうさうさうさうさうさうさう
大坂の志を信じてふりしをあらうて
はるしきと取られたる山をあらうて

こととさうさうさうさうさうさう
かきけりしとさうさうさうさう
田舎

信じてふりしをあらうてふりしをあらうて
そのまき海を渡りいふれ眺をばめく
信じてふりしをあらうてふりしをあらうて
あひめしをあらうてふりしをあらうて
くさうさうさうさうさうさうさう

すうねの末まで二つあらまゝしき
よのくやわけきれてねるにこれら
とんやあらうて

かといふとちの仲津波よりいそがしき
こちやあらうてねるにこれら
むせのうらみ津といふとねる
やうくわきんこすはあつたは
あらうに保のねるにあらう
これ月ありあきとひらねさう

このうらみねるにあらうてねる
わけのうらみねるにあらうて

東海にあらうてねるにあらうて
信濃の東にあらうてねるにあらうて
よのうらみねるにあらうて
ねるにあらうてねるにあらうて
とちのうらみねるにあらうて

かちのうらみねるにあらうて
甲斐の東にあらうてねるにあらうて

わく

うき世の通事と云ふかといやうと云ふか
信濃の王大臣と云ふかそれと云ふか
入世なるい後いふと云ふか
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくく

富貴の世はくくくくくくくくくくくく
それ年の言はく玉の文方事ありてい
く紙中の玉石をくくくくくくくくくく

名子の浦くくくくくくくくくくくく
南帝れ初改りてくくくくくくくくくく
二条を定つれとくくくくくくくくくく

いはいはいはいはいはいはいはいはい
くくくくくくくくくくくくくくくくく
けりい宮れくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく

ある凡そや吹く世をなれぬとの境にありて
まゝ

南方記傳才一巻ハ元弘年中
より貞元元年に治乱興亡大概
これとあると才二巻ハ貞元二年
庚辰より貞治八年丙午まで廿
七巻の間一巻又全部又冊これ
とあるとよりこと元年よりまで

才二巻目録失としてこれのら多年
これよりとん事成りし或国東
鎌倉奥羽或東都吉野河内
播磨勢別紀別故事四巻との
うとこれつぬことといふことこれと
んと御常陸の玉りとかく親房卿
の自筆少く白河結城親朝へと
なりぬき書簡と見えたり書れ
うき書め貞元二年より日め年の



石室東あく又方の合戦の事なり
しからし書写る事



田本

正平二年并文和尚入唐して江島にのりて
遠江國方廣寺の用山とて不りすと宗良の御連枝

